

徹底的に水木しげるの魅力に迫る、回顧展の決定版！

追悼水木しげる

ゲゲゲの人生展



2015年11月30日、93歳で「あの世」へと旅立った水木しげる。「ゲゲゲの鬼太郎」「悪魔くん」「河童の三平」など、数多くのヒット作を生み出した漫画家としてだけでなく、作品を通じて妖怪文化を広めた妖怪研究家としても高く評価されました。本展では、水木プロダクションの全面的な協力のもと、人間・水木しげるが遺したものを徹底的に振り返ります。少年期の習作、戦地で描いたスケッチ、貸本時代からの貴重な漫画や妖怪画の原稿など、卓越した画力とメッセージ性がうかがえる作品の数々に加え、エッセイ原稿や妖怪・精霊像コレクション、私物など合計約390点を展示します。



水木しげる
ちまきしげる

第1章 (少年時代)

境港の天才少年画家

1922年(大正11年)、武良家の次男として産声を上げた水木しげる。自然豊かな鳥取県・境港で、自由奔放に育ちました。幼少期の水木は、近所に住んでいた「のんのんばあ」から妖怪や死後の世界についての話を語り聞かされ、目に見えないことに興味を持つようになります。本章では、水木本人がのちに「国宝」と書いたメモを貼り付けた箱入りのヘソの緒、子どものころからの収集癖がわかる地図や新聞題字のスクラップ帳、才能あふれる少年時代の自画像や油彩画、絵本などを通じて、幼少期から少年期までの水木の姿を振り返ります。



●「思い」1936年

第2章 (従軍時代)

地獄と天国を見た水木二等兵



●ズンゲンで爆風を受ける1988年

1943年(昭和18年)、水木しげるは太平洋戦争に召集され、バブア・ニューギニアの激戦地に送られます。出征前の苦悩が読み取れる手記原稿、戦地に持参した英和辞典、終戦直後の南洋で現地人や自然を描いたスケッチ、自身の戦争体験を重ねて描いた戦記漫画などを通じて、水木が経験した戦争の悲惨さを伝えるとともに、激戦地でも自然や現地人との触れ合いを大切にされた水木の生き方にも触れます。

福の神来たる!!

水木しげるの漫画家人生の中で大きな転機となったのが、1965年(昭和40年)、「テレビくん」での講談社児童まんが賞の受賞です。本章では代表的な水木漫画の原画に加え、当時水木が使っていた日記帳やスクラップブックも見ることができます。さらに、水木しげるが名作を生み出した書斎を会場内に再現し、プロジェクターを使用した映像演出で彩ります。



第4章 (多忙時代)



第5章 (妖怪研究家)

妖怪に取り憑かれて

売れっ子作家となり多忙を極めた水木しげるは、50歳を超えた頃から意識的に仕事を減らし、かねてより興味を持っていた妖怪の研究に没頭し始めました。本章では、息をのむほど緻密に描かれた妖怪画の魅力を紹介するほか、水木が世界中で集めた妖怪・精霊像コレクションの一部を、自宅に設けた妖怪ギャラリーを再現して展示します。



●砂かけ婆 1984年【展示期間:8月6日(火)~8月25日(日)】



- ▲「ゲゲゲの鬼太郎」(妖怪飛行船巨艦号) 1968年
- 「河童の三平」連載第3回扉絵 1969年
- ◎「悪魔くん」単行本カバーイラスト 1985年
- ◎「ゲゲゲの鬼太郎」妖怪危機一髪 前編 1986年

第3章 (貧乏時代)

貧乏神との闘い

九死に一生を得て復員した水木しげるは、片腕を失ったものの、絵描きへの情熱の炎を絶やすことはありませんでした。境港から神戸、東京へ居を移し、紙芝居作家から貸本漫画家となりますが、原稿料はごくわずか。食うや食わずの生活からはなかなか抜け出せませんでした。戦後に描いたどこか空虚さを感じるスケッチや、後の「ゲゲゲの鬼太郎」の原作となった貸本漫画「墓場鬼太郎」など貧乏生活の中で必死に描いた数々の貸本漫画原稿を展示します。水木夫妻が新婚当初暮らしていた居間を再現したコーナーには、実際に夫婦で作ったプラモデルや当時使っていた背広なども展示します。



●墓場鬼太郎 怪奇一番勝負 1962年



貧乏時代の居間再現コーナー



●一反木綿 1991年【展示期間:7月13日(土)~8月5日(月)】

エピローグ 水木しげるは永遠に

ここでは、人間・水木しげるのプライベートな側面に迫ります。「理想の死に方」と題したエッセイの生原稿、50年以上にわたり水木を支え続けた「ゲゲゲの女房」こと布枝夫人へのインタビュー映像や、約50人の各界著名人からの追悼メッセージを通じて、水木が遺したものを、我々に伝えたかったことは何だったのかを探ります。



提供:朝日新聞社

©水木プロダクション

※一部作品の展示替えがあります。(展示期間を特に記していない作品は、全期間展示いたします。)